

ハクサイと肥料

茨城県境地区農業改良普及所長

稲葉 昭二

茨城県のやさい作付面積は 37,600 ha 程度、このうち白菜は 5,830 ha で全体の 16% で第 1 位を占めている。

当普及所管内の白菜の作付状況も、そさいの中では最も多く 1,000ha で、秋やさいの王座を誇っている。しかし歴史が古く、連作につぐ連作のためいろいろな問題が発生し、生産者はもとより関係者もその対策に苦慮している。

生産状況

品種の主なものは早生種は長交 60 日、湘南 2 号、中晩生種は王将、力、横綱で、早生種が作付面積の 50~55% を占めている。

播種は練床と直播が実施されているが、大部分は練床育苗である。播種時期は早まきの傾向が強くと 7 月下旬まきも見られるが、一般には早生種で 8 月上旬、中晩生で 8 月中旬まきで、その育苗期間は 12 日~15 日である。

白菜の前作物はかぼちゃ、西瓜、トマト、メロン、キャベツ、タバコなどである。

定植本数は 10 a 当り早生種が 3,600 株前後、中晩生種が 2,700 株前後である。

施肥は燐安系と尿素系の高度化成肥料が多く使われている。

境町地方の例

肥料名	元肥	追肥
B M 燐 燐	40kg	kg
くみあい燐硝安加里 S 6 0 4	100	
くみあいNK化成 8 0 8 号		70
有機オール	40	
苦土石灰	120	

岩井市地方の例

肥料名	元肥	追肥	
		1回	2回
堆肥	2,000kg	kg	kg
くみあい燐硝安加里 S 6 0 4	80		
くみあいNK化成 8 0 8 号	60	30	30
B M 燐 燐	60		
炭酸苦土石灰	100		

これらの元肥は定植前に全面散布し、全層にすき込んでいる。追肥は第 1 回は定植後 10 日頃 40 kg、第 2 回は結球開始時（定植後 30 日目頃）に 30 kg 施している。この際、除草を兼ねて中耕を行う。

病虫害防除は軟腐病にストマイ剤、根コブ病にブラシコールなどの PCNB 剤、白斑病、べト病にダイセン、ダイファなどを使っているが、少なくとも 5 回以上の薬剤散布を実施している。しかし早まきのあまり、軟腐病、ウィルス、根コブの病害も相当発生している。

収穫は早生種が 10 月中旬、中晩生種が 11 月中旬から始まっているが、10 a 当りの収量は早生種が 3,000 kg 前後、中晩生種が 4,000 kg 前後である。

当面の技術対策

当地方はやさいの栽培が盛んなため、普通畑作物にくらべ施肥量が多いので、畑土壌の悪化が甚だしい。すなわち土壌の物理性、化学性とも問題があり、総合的に土壌改良を実施しなければ、高生産は望めない現状である。

白菜の場合でもハウソ欠乏、石灰欠乏、苦土欠乏などが見られ、収穫皆無の例もあるので合理的な施肥が必要である。また吸肥力が弱い作物なので、施肥の適不適に左右されやすく、特にチッソ、石灰、カリの影響が大きく現われるので、次のようなねらいで肥料を施す必要がある。

まず土壌への有機物の還元である。少なくとも堆肥 2,000 kg 施用する。これと土壌改良も含めて BM 燐燐、苦土石灰を施し、燐酸の富化と酸度を矯正しなければならない。

元肥の化成肥料は速効性の高度化成（燐硝安加里など）を用い、全生育期間肥切れが現われないよう追肥を施すが、追肥も時期が大切で、またカリの必要以上の施用はさげなければならない。（カリ過剰による苦土欠の恐れがあるから。）

また生育中にハウソ欠乏を確認したらハウソか、ホウ酸の 0.5% 液の葉面散布が必要だが、過剰害が現われやすいので注意する。

次に土壌病害、根コブ病の総合防除であるが、大なり小なりこの被害を受け、全滅の場合もある。特に被害の多い畑は酸性、アブラナ科作物の連作、排水不良畑なので、次のように防除する。

まず、無病の土を苗床に用いることと、苗床の消毒を実施する。畑は石灰を施し酸度を矯正するとともに、排水を良好にしなければならない。

また播種期が早いと発病しやすいので遅くし、発病株を発見したら焼却する。

次に薬剤処理であるが、一般的な畑は PCNB 剤を 10 a 当り 20 kg を全面散布し耕起する。発病した畑、或いは甚だしい畑では、前記に加えて植穴処理か、まき溝処理を行わなければ、充分な効果が現われないので注意する。